

地域子育て支援拠点における 相談のあり方について

池田佐輪子 岩丸 明江

地域課題研究
「地域づくり」に関する調査研究

2014年3月

地 域 づ く り 研 究 会
(地 域 課 題 研 究 実 行 委 員 会)
北九州市立大学都市政策研究所

地域子育て支援拠点における相談のあり方について

池田 佐輪子 岩丸 明江

(コラボラキャンパスネットワーク親子ふれあいルーム実行委員)

少子化問題のなかで、3歳未満児の約7～8割は在宅で子育てしており、子育ての孤立化、子育ての不安感、負担感が高まっていることが指摘されている。また核家族化、地域のつながりの希薄化、男性の子育てへの関わりが少ないこと、児童数そのものが減少しており、子どもの多様な大人・子どもとの関わりの減少も課題となっている。

そこで、厚生労働省は、「地域子育て支援拠点」を設置し、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を、公共施設や保育所、児童館等の地域の身近な場所で展開している。

(平成23年度 地域子育て支援拠点事業実施箇所数 5722箇所 内閣府ホームページより)

地域子育て支援拠点は、概ね以下の～の事業

交流の場の提供・交流促進

子育てに関する相談・援助

地域の子育て関連情報提供

子育て・子育て支援に関する講習等 を実施することが求められている

北九州市でも、「親子ふれあいルーム」として、下記のような形で設置している。

親子ふれあいルームとは(北九州市ホームページより)

子育ての不安感を緩和し、子どもの健やかな育ちを促進するため、子育て家庭の親とその子ども(概ね3歳未満の乳幼児)が気軽に集い、相互に交流を図る場として、「親子ふれあいルーム」を区役所または近接する公共施設や一部の児童館において開設しています。(小倉南区は 小倉南区若園5-1-5 小倉南生涯学習センター1階)

今回は、この地域子育て支援拠点の一つである、小倉南区親子ふれあいルームさざん(以下 さざん)の相談体制について、現在実施している、「ハテナタイム」という相談システムについて報告するとともに、こうした拠点での相談のあり方について、のぞましい仮説を提起することをねらいとして、まとめてみたい。

1. さざんの現状の相談システム

さざんの相談には2種類ある。

スタッフへの日常的な相談

(さざんのスタッフ体制は、【月～金 10-16時 スタッフ2名常駐】であり、概ね、

12名程度でローテーションしている。(「相談対応」としての専任スタッフはいない)
 子育てハテナタイム(担当者有)
 まず、日常的な相談の現状を分野ごとにみる。

さざんの日常的な相談について

相談件数 25年4月～9月

相談内容	相談件数(延べ)						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	計
1 生活習慣・しつけについて	0	1	0	1	3	0	5
2 発育・発達・情緒について	1	3	0	0	0	0	4
3 家族・家庭環境・近隣環境について	2	0	0	1	1	0	4
4 病気・怪我などについて	1	0	0	1	1	0	3
5 保育所・幼稚園について	1	1	0	0	2	2	6
6 遊びについて	0	0	0	2	0	2	4
7 その他	1	0	1	3	1	0	6
計	6	5	1	8	8	4	32

(1) 生活習慣・しつけについて

- ・1歳2カ月男児、周囲のママが働いている人が多く、どんどん断乳しているが、自分もしたほうがいいのか？ 働く予定がないなら、ゆっくりでもいいのではないかと話をした。
- ・こども0歳のママより、メディアの掲示物について質問あり。資料をほしいと言われたので、コピーして渡した。パパのTV点けっぱなしやラジオはいいのか？など色々話をした。あんまり怖がらずに、うまく付き合う方法をアドバイスした。

(2) 発育・発達・情緒について

- ・おもちゃをひとりじめして、なかなかゆずれない。ちょっと相談したい時はどこにしたらいい？ ハテナタイムを紹介、申込みれました。

(3) 家族・家庭環境・近隣環境について

- ・一時預かりの保育所を教えてほしい。

(4) 病気・怪我などについて

- ・子どもが家で頬を打ち、口の中を切った。痛みからか食事もとらない。病院へ連れていくか？ すぐ直ると思うが、気になるようなら病院で消毒してもらおうといいかも

(5) 保育所・幼稚園について

- ・幼稚園と保育園の違いは？(最近北九州に引っ越してきた方) 昼食時に周囲の方も交えて雑談。

- ・12月中旬(生後6ヶ月)で職場復帰しなければならない。病院内の保育所か普通の認可保育所のどちらに預けた方がいいか迷っている。参考にしたいので意見を聞かせてほしい 両方の保育所の環境、保育料、何を迷っているのか(おそらく復帰が早いことと自体悩んでいる様子だったので)など話してもらい、そのうえで私見を述べた。「参考にします」と安心した様子で終話した。

(6) 遊びについて

- ・絵本を破ったり舐めたりすることについて・・・年齢的にそういう時期なので、硬い絵本を与える。破る事に興味があるなら広告の紙などを与える。等のアドバイスをした。
- ・さざんのほかに南区で無料で遊べる所はありますか 居住地近くの児童館や支援センター、館報等のご案内をした。

(7) その他

- ・保健師さんは簡単なことでも相談していいですか? いいですよ
- ・小倉南区の津田に住んでいますが、南区でいい小児科を知りませんか?

件数については、日誌にその日の当番が、自ら受けた相談の件数を書くことになっている。6カ月で32件では、多い印象は受けないかもしれないが、実際は、2人のスタッフ以外にもボランティアが在室していること多く、また(Cスタッフと呼ばれる)子連れのボランティアもいるため、話の中で、たくさん話題や、情報交流が生じていると思われる。まさに、そうしたカウントが難しい多様な日常的な相談が交わされることがこのような拠点の存在価値かもしれない。

そのなかでも、内容は、例えば「保健師さんは簡単なことでも相談していいですか?」など、「改めて聞きにくいこと」を気軽に聞いたり、一時預かりの保育所について聞くなど、情報提供で済むようなこと、また、「おもちゃのひとりじめ」など、不安そうなので、後述する専門家によるハテナタイムにつなぐなどの相談もあっている。ここが相談の入り口、きっかけとも言える。

子育てハテナタイム

(1)「子育てハテナタイム」とは

「子育てハテナタイム」とは、養育者が、子どもの遊びを見守りながら、日々の子育てをする中で気になること、分からないことなどを発達専門の先生に気軽に相談できる場として、さざんの中に開設したものである。

(さざんニュース呼びかけ文より)

H 2 5 年度は原則 第 4 月曜日 10 : 00 ~ 12 : 00 定員 4 名 随時申込可

子どもの行動でわからないことや「こんな時どう関わったらいいのかな？」と思うことがあったら、どうぞお気軽に北九州市立大学・税田慶昭先生（発達心理学・臨床心理士）にご相談ください。先生とお話した方が「安心しました」「先生がヒントをくださったこと、試してみますね」とたくさん声を寄せてくださっています。

定員に達していない場合は、当日申し込みでもOKです。

ハテナタイムは、さざんが開所して4年経つが、かなり広報がすすんできており、相談者は、ほぼ毎月定員の4名と安定している。

(2) 「子育てハテナタイム」の開設にあたって

日々の子育ての中で気になることがあっても、専門機関に相談に行くほどではないものの、身近にある育児雑誌やインターネットでの情報では納得できるまでには至らず、育児の経験のある友人や祖父母に相談しても、いまひとつ我が子には当てはまらないような気がしてしまう……。子育てをしている方たちは、そのような思いを持たれているのではないだろうかと予想を立て、親子ふれあいルームの中でどのような相談形態が望ましいのかを、現場で活動している臨床心理士、発達心理学を専門とする大学教員、保健師、保育士など専門職のアドバイスもいただきながらスタッフで検討していった。

まずは、いつも利用している遊び慣れた環境で気軽に相談できること、子どもと一緒にその遊びを見守りながら相談できること、しかし発達の専門の先生による相談が受けられ、個別の問題に対応してもらえることで安心感が得られること、を重視し、「子育てハテナタイム」という名称で、あえてルーム内のオープンな遊び場での相談形態で開設した。

(3) 「子育てハテナタイム」の流れ

ハテナタイムは、担当してくださる北九州市立大学の税田先生が来所可能な日程を調整し、平成 25 年度では第 4 月曜日の 10 時から 12 時までの時間に、定員 4 名で相談を受けている。

毎月、さざんニュースやルーム入り口の立て看板に「子育てハテナタイム」の掲示をして申し込みによる予約を行い、当日に受付スタッフが予約した相談者に簡単な質問紙に「子育てに関する気になること」の記入をお願いし、税田先生につないで、遊びの場の一角にスペースを取って相談を行っている。

その間、相談者のお子さんについては、安全が保たれるように、また相談者の顔が見える場所で遊ぶことで安心感が持てるように、ハテナタイム担当のスタッフが遊びの相手を

し、他のスタッフも見守りを行っている。このような体制をとることで、相談者は落ち着いて話を聞くことができるようである。

またスタッフがルームの集団の中で相談者のお子さんの遊びの相手をしていることで、その様子を見ながら相談者が具体的に税田先生に説明できること、それによって税田先生が分かりやすく子どもの発達の様子やその関わり方についての説明ができること、などオープンな遊びの場での相談形態の良さが表れているように思われる。

当初は、たくさんの利用者がある遊び場での相談では周りに遠慮して本音が出せないのではないかと、周囲が騒がしく、子どもが気になって落ち着いて相談できないのではないかと、また、周囲の利用者が相談者に対して興味本位の視線を持つのではないかと、といった心配もしていたが、この4年間のハテナタイムの相談の結果を見てみると、特に定着してきたからはほぼ毎月定員いっぱいの相談者がおり、相談後はほとんどの方が、「相談できて安心した」、「さっそく実行してみようと思う」と感想を下さり、それらは大きな問題ではなかったことが分かった。

(4)「子育てハテナタイム」を通して

相談を受けた方は、下記のような理由で、ハテナタイムを活用している。

(28名の方 複数回答)

	ハテナタイムで相談した理由(複数回答)	数
1	気軽に相談できるから	14
2	いつも遊びに来ている場所で相談できるので	9
3	子どもと遊びながら相談できるから	12
4	きょうだいがいても一緒に相談できるから	3
5	相談できるのが発達の専門の先生なので	13
6	友だちにすすめられたから	2
7	チラシ(ニュース)にのっていたから	7
8	スタッフにすすめられたから	6
9	無料だから	7
10	その他()	3 ・市民センターの発達障害の講演会で聞いて ・一度話を聞いた事があって、優しそだったから

「気軽に相談できる、遊びながら相談できる、発達の専門家の先生に相談できる」との理由が多い。「いつも来ている場所で相談できる」の理由も次につづく。

ハテナタイムを担当していただいている税田先生の人となり、雰囲気にも助けられ、敷居が低い、日常の過ごし方との連続性のある相談の機会となっている。

ハテナタイム集計 2013 (H25) 年度 4月～1月

相談予約児数 44名 (うち9名は病気などの理由で来所できず、キャンセル)

相談実施児数 35名

相談予約者数 40名 (4名はきょうだいで相談)

相談実施者数 32名 (3名はきょうだいで相談)

(集計方法や受付表を、今年度、税田先生・スタッフと相談しながら、整備中です。途中のものですが、集計結果です。)

子どもの居住区	南区 (26) 北区 (6) 門司区 (1) 市外 (2) 不明 (9)			
相談者	母 (39) 祖父 (1)			
子どもの性別	男児 (27) 女児 (17)			
第何子	第1子 (26) 第2子 (9) 不明 (9)			
子どもの月齢	1:0か月～6か月未満	0	2:6か月～1歳未満	4
	3:1歳～1歳6か月未満	8	4:1歳6か月～2歳未満	14
	5:2歳～2歳6か月未満	5	6:2歳6か月～3歳未満	5
	7:3歳～4歳未満	2	8:4歳～5歳未満	2
	9:4歳～5歳未満	2	10:6歳以上	2

子どもの居住区は、さざんが立地している小倉南区が圧倒的に多く、全体の約6割を占めている。南区を中心にしたさざんの利用者がさざんニュースや立て看板の掲示を見て、気軽に申し込み、相談に来られている印象である。

それだけでなく、さざんのスタッフに子育てのいろいろな話をする流れから、「気になることがあったら、発達専門の先生が相談に乗ってくれるから申し込んでみれば」とスタッフから紹介されて利用につながったり、利用者同士で話をする中で、「発達の先生に相談に乗ってもらってとても安心したから、気になったら相談してみれば」と口コミで伝わって申し込まれる方もおり、さざん利用者の中では以前より周知がすすんできており、相談にいたる敷居は低くなって、より気軽に利用されていると思われる。

この中に、特に他地区からの利用者で日頃からさざんを利用しているのではないが、ハテナタイムのことをニュースやホームページなどで知り、申し込んで来られる方がわずかだがおられる。初回のさざん来訪でハテナタイムを利用され、その後のさざん利用につな

がっていない例である。現在はまだこの例について詳しい分析ができていないが、今後詳しく検討していく必要があると考えている。

相談者はそのほとんどが母親で、子育てを担っているのが母親であるという実情が浮き彫りになっている。子育てが母親に一手にかかってきており、子どもの発達や関わり方について気になることがあっても、家族に相談したり、子育ての分担をしたりできにくい環境になって、より子育ての負担感が重くなってしまっているのではないかと考えられる。

子どもの性別は、男児の相談がやや多く、この4年間の統計でも男児の相談が6割を占めた。また第1子の相談が多く、全体の6割であった。第1子の相談が多いのは、初めての子育てで、疑問や不安が多くなることに原因すると予想できるが、男児の相談が多いことについては税田先生などに協力していただいてその要因について検討し、今後に生かしたいと考えている。

詳しい相談内容などについては、次ページの表のようになっている（平成25年度4月から1月までのデータの集計）。

相談内容は、子どものついでに多様な相談や、子どもへの関わり方の相談が多く、特に生活習慣が身に着くようになり、自我・社会性の芽生えが感じられるようになる1歳から2歳の間の相談が多くなっている。

それら個別の相談について、ご自身も就学前のお子さんを持つ当事者でもある税田先生は、熱心に耳を傾けて話に聞き、共感してくださるので、まず相談者は話をすることで内容の整理ができ、抱えている不安や疑問を客観的に見られるようになるようである。そこに先生が安心できるように子どもの発達について説明し、関わり方についてわかりやすくアドバイスしてくださるので、相談されたみなさんは、「安心した、気持ち楽になった」「アドバイスを実行してみようと思う」などの感想を寄せ、子どもとの関わりに前向きになれているようだ。相談者の相談後の表情は、非常に明るくなっていることが多い。

そのような中で、専門機関を受診するかどうか迷いながら相談される方や、相談者が子育てに疲れており他のサポートシステムとつないだ方が良いと思われるような方もおられる。そのような方に対しては、税田先生は十分に話を傾聴したのちに、「気になるようでしたら受診してみてもいいかですか」という形で、適切な専門機関を紹介することもある。また地域の保健師さんに連絡して、見守りなどの連携をお願いすることもある。「地域の親子ふれあいルーム」の利点をしっかり生かした連携ができるように、日頃からの連携が重要になってくる。

また、専門機関を受診中の方や、専門機関の予約待ちの方も相談に来られることがある。ハテナタイムにはセカンドオピニオンのような役割もあるのではないかとと思われる。問題解決を主とする専門機関とは異なり、あくまでも相談者のサポートとしての相談形態の良

さがあるのではないだろうか。

税田先生は、さざんのスタッフに対しても、相談者やそのお子さんとの関わり方についてのアドバイスを下さっている。スタッフも安心して様々な利用者に関わることができるとともに、スタッフには難しい内容を先生につなぐことができ、先生が月1回きてくださることでスタッフとしてのあり方もご相談でき、とても心強い存在になっている。

さざんのフロアで遊んでいる利用者が、相談中の様子を見て、「私も相談していいですか」というように当日の申し込みもあるのは、ハテナタイムの良さ認められているからだと考えられ、このようにハテナタイムの良さが利用者の中に広がっていくことで定着していると思われる。

ハテナタイム集計 2013(H25)年度														
カテゴリー	番号	内容	0歳前半 件数	0歳後半 件数	1歳前半 件数	1歳後半 件数	2歳前半 件数	2歳後半 件数	3歳児件数	4歳児件数	5歳児件数	6歳以上 件数	合計	
身体発達・健康状態	A	1 身体発達(身長・体重、首の座り・寝返り・歩行など)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	2	
		2 知覚発達(視覚・聴覚など)		1		1							1	
		3 疾患・障害など		2									2	
生活状況	B	4 食事(授乳・卒乳、離乳食、偏食など)			2	1				1			4	
		5 排泄・トイレトレーニング											0	
		6 睡眠(生活リズム、昼夜逆転、夜泣きなど)			3	1							4	
相談内容		7 メディア視聴											0	
		8 ことばの発達(発語が遅い、発音が不明瞭、奇声、吃音など)				5	1						6	
		9 コミュニケーション発達(視線が合いにくい、やりとりができにくい、人見知りなど)		1		1							2	
		10 性格・行動(わがまま・癪癪、不注意・多動、引っ込み思案など)			5	6	1	1	1	1			1	16
		11 気になる癖・こだわり行動					1				1	1		3
		12 幼稚園・保育園(一時保育、就園など)			1	1								2
		13 他児との関わり(乱暴、ケンカなど)			2	2	1	1					1	7
集団への参加		14 子どもへの関わり方			3	6	2	4	2	2	2	2	23	
		15 保護者(疲労、育児ストレスなど)				2							2	
		16 家族関係・きょうだい関係(配偶者の育児参加、赤ちゃん返りなど)			2	3	3	2	1			1	9	
家族・保護者		17 しつけ				2	1				1		4	
		18 その他					2						2	
先生からのアドバイス		1 子どもの発達の説明と関わり方のアドバイス		2	7	12	2	4	2	2	2	2	35	
		2 専門機関の紹介		1		1						1	3	
		3 その他											0	
先生からスタッフへのアドバイス		1 保護者の話の傾聴サポート		2	7	12	2	4	2	2	2	2	35	
		2 子どもへの関わり方のモデリング		1	5	12	2	4	1	2	2	1	30	
		3 その他											0	
ハテナタイムへの経路		1 さざんニュース・立て看板・HPなどから		1	5	9	1	2		2	2		22	
		2 さざんスタッフから					1		1				2	
		3 さざん利用者から					1						1	
		4 さざん以外の情報から		1									1	
その後の経過		1 さざんの継続利用			1	6	1	1			1		10	
		2 来所が途絶える											0	
		3 専門機関へ											0	
		4 幼稚園・保育所へ											0	
		5 その他											0	
保護者感想等		1 アドバイスを受けて安心した、気持ちが楽になった		2	6	10	1	4	1	2	1	2	29	
		2 アドバイスを実行、実践してみようと思う		1	4	7	2	3	2	2	2	1	24	
		3 また相談したい				2	1						4	
		4 まだ不安、疑問を感じる											0	

まとめと今後の課題

以上のようにさざんでは、地域子育て支援拠点における相談のあり方として、日常的な相談においても、「子育てハテナタイム」での相談においても、「**日常の遊びの場での相談**」を目指して取り組んできた。そのような環境を整えることで、日常の子どものありのままの様子が見られるため、スタッフが相談者の話を傾聴したり、**関わりのモデリング**をしてもらったりといった支援がしやすくなっている。また必要に応じて相談者の意向を重視しながら、適切な支援につなぐことも可能になっている。

さらに、専門機関での支援へつなぐだけでなく、療育が必要な場合であっても、多様な子ども・大人と関わり一緒に遊ぶことができる交流の場、**インクルージョン**の機能も果たすことが必要であると考えている。子どもにとって、自我・社会性が芽生えてくる、ちょうどさざんを利用することの多い3歳までの早期から多様な人たちと関わることは、不要な偏見を持たないために重要なことであろう。

平成元年まで療育センターでの勤務経験のある、大北啓子氏（臨床心理士）は、さざん主催の相談研修で以下のように発言している。

「療育センターは、今でもハードルが高い印象があり、そこにたどりつくまで大変です。子ども総合センターやわいわい相談に関わるようになって思うのは、外来や通園（週3回でも）で、親子にピンポイントで出会うけど、そのほかの生活の場で親御さんが上手に関わることで効果があがるということです。外来受診の日まで、待つ間が不安でしょうし、さざんもそこを埋める役割があると思います。今回、ようやくそういうことができるようになったなあ、と思いました」。毎日空いている生活の場だからこそ、そうした交流や、インクルージョンの可能性があると確認できたことは大きかった。

そのためには、まずスタッフが養育者の話を傾聴できるだけの心のゆとりを持ち、支援するために必要な知識を常に学ぼうとする姿勢が必要になる。安易なアドバイスではなく、養育者の気持ちに寄り添うことで、養育者が子どもと向き合う気持ちをエンパワメントできるように関わるのが望ましいと考えている。それによって養育者が遊びの中で子どもをサポートしやすくなり、子どもも、自分の親だけでなく多くの大人と関わり、他の子どもたちと一緒により多くの望ましい経験ができることと思う。

2. 地域子育て支援拠点におけるのぞましい相談システムのあり方

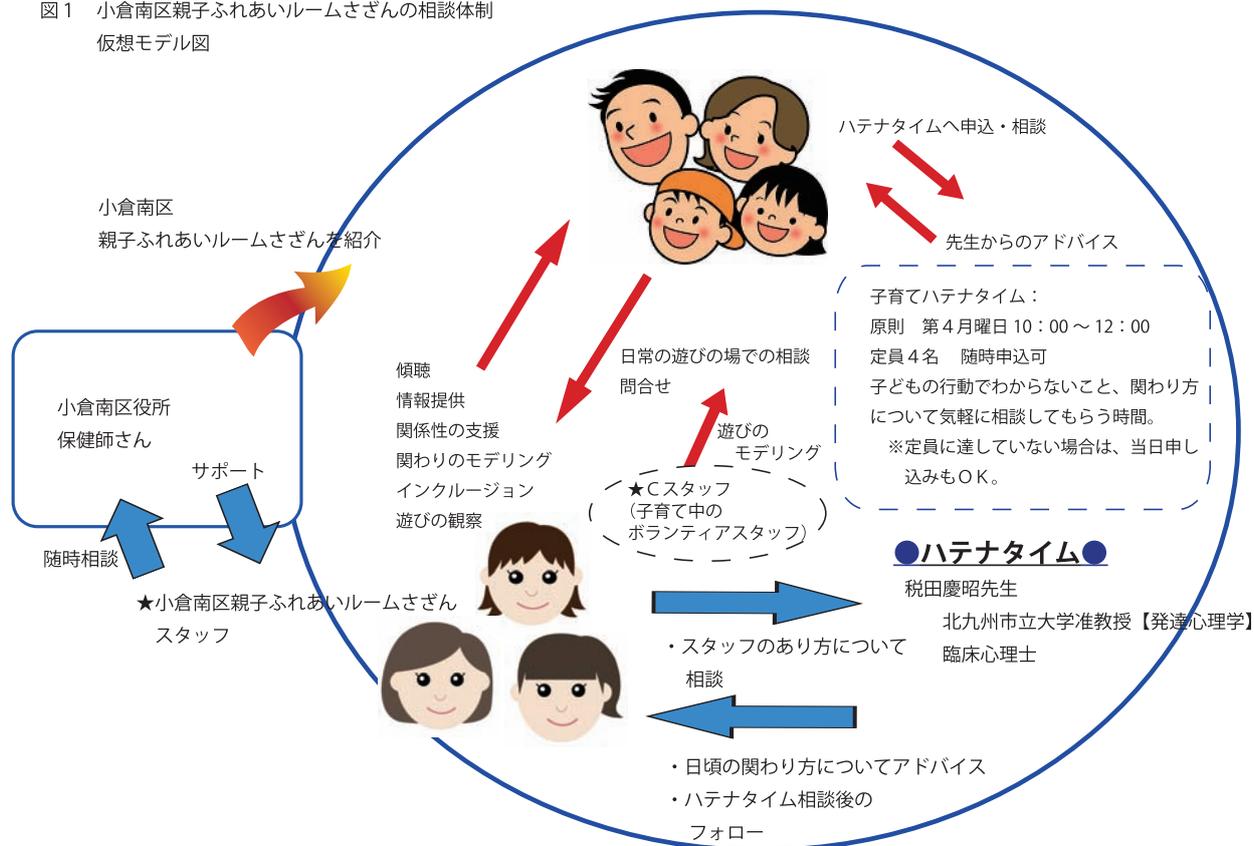
（仮想モデル図の提案）

さざんでの現在の相談状況（日常の相談、ハテナタイム）をみてきた中で、【図1】のような仮想モデル図を構想した。

スタッフの視点でのキーワードとして、前出の「日常の遊びの場での相談」「傾聴」「関わりのモデリング」「インクルージョン」のほかに、「遊びの観察」「関係性の支援」をあげている。

「遊びの観察」は、スタッフが、相談を受けたり、不安が強い利用者について、子ども

図1 小倉南区親子ふれあいルームさざんの相談体制
仮想モデル図



の遊びの様子や（利用者の様子についても）よく観るようにしており、毎日同じスタッフが常駐してはいないので、適切な支援のために、日頃の遊びの様子にもできるだけ注意深く見守り、共有を試みている内容を意味している。

「関係性の支援」については、遊びのなかでの子どもの反応や、他の大人・子どもとのやりとりの中での子どもの行動を、子どもの思いを共有できるように、養育者の方とのお話を心がけるようにしている。子どもに寄り添い、子ども視点で、なぜそういう行動をするのか、を養育者と共に見つめていくことが、子どもを理解することにつながり、親子の関係性の支援につながるのではないかと感じる。そうしたキーワードを盛り込み、日常の遊びの場と、ハテナタイムとの関連を考えた。

また、保健師さんについては、多様な行政の資源を背景に、さざんに利用者をつないでくださっている動き、さらに、こちらからお願いしたときに、様々なサポートで支えていただいている関係性を図式化した。実際は、もっと多くの社会資源ともつながっているが、この図では、シンプルに保健師さんとの関連を描いた。その他の地域資源、民間資源などは、利用者の意向・希望というファクターもあるので、図には表現していない。

こうした仮想モデル図を考えてみたいと感じたのは、現在のさざんの事業が、たくさんの市民に受け入れていただき、ハテナタイムも、定着してきたからにはほかならない。

現在のところ、この2つの相談形態が、利用者にとって好意的に受け入れられており、期待をもって利用されていると考えてよいのではないだろうか。地域の中に根ざす親子ふれあいルームとしての相談形態として望ましいのではないかと考えている。

スタッフのたゆまぬ研鑽が大前提ではあるが、今後、この仮想モデル図を検証していきながら、さらに利用者にとってどのような支援・相談体制が望ましいのかを考えていくとともに、専門機関や他区の親子ふれあいルームなど、地域子育て支援拠点の場と連携し、市内のどこでも適切な相談が受けられる体制を作っていけるように、働きかけていきたいと考えている。